他校との合同学習を通して児童の伝える力を高める指導に関する研究
－遠隔合同授業の伝え合う活動における学習過程の工夫を通して－

防府市立小野小学校　教諭　田中　啓一

1　研究の意図

(1) 研究の背景

第３期教育振興基本計画では、育成すべき情報活用能力の一つとして、「受け手の状況などを踏まえて発信・伝達できる能力」＊[1]を挙げている。また、「多様性ある学習や専門性の高い授業等を実現させる観点から，遠隔教育の推進を図る」＊[2]ことが示されている。

(2) 研究テーマ設定の理由

昨年度、原籍校での４年生社会科の授業において、地域について調べて伝え合う活動を、防府市立大道小学校（以下「相手校」という。）４年生と遠隔合同授業により行った。その際、相手校の児童へ発表内容が十分に伝わらなかったことから、学習過程において児童の伝える力を高めるための工夫を講じる必要があると考えた。そこで、本研究では、遠隔合同授業での伝え合う活動において、原籍校と相手校で、児童に身に付けさせたい伝える力を「みんなで作る伝える力」として共有する。さらに、学習過程の工夫として、「伝え方の工夫を話し合う活動」「自他の表現を比較する活動」「伝える力の高まりを自覚できる振り返りの活動」を設定する。

(3) 研究の仮説

遠隔合同授業の児童同士が伝え合う活動において、両校で児童に身に付けさせたい力を共有し、学習過程を工夫しながら振り返り活動を継続的に行っていくことにより、相手に分かりやすく伝えようとする意欲や態度を育み、伝える力を高めることができる。

2　研究の内容

(1) 本研究における「伝える力」について

本研究における「伝える力」とは、「自分の伝えたいことを、相手を意識して分かりやすく伝えることができる力」と捉え、児童が学習過程において意識できるようにした。

(2) 授業実践

原籍校４年生15人と相手校４年生24人の児童を対象に、同期型と非同期型の授業形態を組み合わせた授業を実践した（**表１**）。また、学習過程においては、**表２**に示す工夫を取り入れた。

表１　授業実践の概要

第１回授業実践（６・７月）　国語科「事実を分かりやすくほうこくしよう」 全12時間（〈同〉2時間、〈非〉10時間）			
学習内容・方法	自分の学校や地域について取材したことを新聞で表現し、感想を伝え合うことでよりよい表現の仕方を捉える。		
指導計画	1	〈同〉	自分の学校や地域について新聞づくりをするための学習計画を立てる。
	2～11	〈非〉	班で取材し、新聞を作成する。新聞づくりの際に気を付けることを「みんなで作る伝える力」にまとめる。互いに作成した新聞を読み合いコメントを書く。
	12	〈同〉	感想を伝え合う。
第２回授業実践（９・10月）　社会科「きょう土の伝統・文化と先人たち　～残したいもの　伝えたいもの～」 全11時間（〈同〉3時間、〈非〉8時間）			
学習内容・方法	地域の伝統や文化について調べたことを、プレゼンテーションで表現し、質問し合ったり、改善したものを見合ったりすることで、より伝わる表現の仕方を捉える。		
指導計画	1	〈同〉	自分の地域の伝統や文化をプレゼンテーションにまとめて伝え合うための学習計画を立てる。
	2～4	〈非〉	班で調べたことをプレゼンテーションにまとめる。互いに作ったものを見合い、もっと知りたいことをコメントに書く。
	関連教科：国語科 〈非〉プレゼンテーションを作成する上での工夫点を出し合い、「みんなで作る伝える力」にまとめる。		
	5	〈同〉	質問し合った後、自分たちのプレゼンテーションについての改善点を話し合う。
	6	〈非〉	プレゼンテーションを改善する。
	7	〈同〉	改善されたプレゼンテーションを見合い、互いの文化の良さを伝え合う。
	8～11	〈非〉	個人で県の文化財を調べ、その良さを伝え合う。伝統や文化を受け継ぐために自分たちができることを考える。

※　〈同〉　…　**同期型**　：遠隔教育システムを使って直接画面を通してリアルタイムでやり取りを行う授業（同じ時間）
　　〈非〉　…　**非同期型**：クラウド上でつながって継続的なやり取りは行うが、リアルタイムでやり取りは行わない授業（異なる時間）
　　班の構成：第１回 【（全10班）原籍校４班：４人程度、相手校６班：４人程度】
　　第２回 【（全10班）原籍校５班：３人程度、相手校５班：５人程度】

表２　学習過程の工夫

学習過程の工夫	活動内容	第1回	第2回
伝え方の工夫を話し合う活動	・表現物を作成する際に工夫することを「みんなで作る伝える力」にまとめる。	2～9時間目で随時	国語科で
自他の表現を比較する活動	・非同期型の授業で、表現物を見ながら質問や感想をコメントする。	11時間目	4時間
	・同期型の授業で、相手に直接質問を行ったり、感想を伝え合ったりする。	12時間目	5･7時間目
伝える力の高まりを自覚できる振り返りの活動	・振り返りの記述を写真で撮影してクラウド上に保存し、共有する。	全時間	全時間
	・表現物に対して、伝わり具合を「みんなで作る伝える力」を使って振り返る。	12時間目	5･7時間目

(3) 授業実践の結果と考察

ア　児童の振り返りの記述の分析

児童が学習の振り返りとして記述した「今日の学習で意識したこと」を、テキストマイニングの手法により分析した（**図１**）。テキストマイニングには、樋口による日本語テキスト型データ分析システム（KH Coder3）を用いた。「相手」「分かる」という言葉を使っていた児童は、同期型の１時間目より３時間目の方が増加した。また、同期型の１時間目にはなかった「改善」という言葉が多く出てきた。相手に分かりやすく伝えようとする意識が高まっていることが分かる。

同期型１時間目（１時間目／全 11 時間）

	抽出語	数
1	相手	28
2	分かる	28
3	小学校	27
4	書く	22
	(省略)	
23	本	5

抽出語 23 語 合計数 308 回

同期型３時間目（N=38）（７時間目／全 11 時間）

	抽出語	数
1	分かる	48
2	相手	47
3	小学校	45
4	改善	25
	(省略)	
38	良い	5

抽出語 38 語 合計数 443 回

図１　抽出語（５回以上）の集計

イ　感想や発話・行動記録の分析

２回の授業実践を終えてからの感想では、「発表が苦手だったけどできるようになった」「恥ずかしがらずに話せるようになった」など９割の児童から伝える意欲の向上に関する記述が見られた。また、画面を通した話合いについて、「『ちょっと待ってほしい』と言ったら『いいよ』と優しく言ってくれて、とても嬉しかった」と記述した児童もいた。児童の発言や行動からも、同様に相手を意識したやり取りが見られた。聞き取りにくさを補うために、自分たちがジェスチャーなどで動きを見せたり、タブレット上に文字を書いて提示したりするなど、何とか伝えようと工夫していた。これらは、相手に分かりやすく伝えようとする意欲が向上し、実践する態度に変容したものと思われる。

ウ　表現物の変容の分析

第２回授業実践で児童が作成したプレゼンテーションについて、「みんなで作る伝える力」（**表３**）の14項目（網掛け箇所）に基づいて分析した。同期型の授業で質問し合う前と質問し合った後において、各班のできていた項目数の平均を比較した。質問し合う前は7.8項目であったが、質問し合った後では11.1項目に増加していた。どの班も１項目以上増えていたことからも、内容が伝わるように改善し、内容を深めようとしていたことが分かる。

表３　みんなで作る伝える力

新聞づくりで見付けた力（第１回）	プレゼンテーションづくりで見付けた力（第2回）
・相手が読める字を書く。（きれいな字を書く。）	（スライド）
・相手の気持ちになって書く。	・文字の大きさを使い分ける。
・相手のこと（意見など）を聞いて書く。	・大切な言葉に色を付ける。
・文字の大きさや太さを考える。	・説明に合った写真やイラストを使う。
・絵や図、写真、表などを入れる。	・短い言葉で説明する。
・くわしく書く。	・デザインをそろえる。
・見出しを工夫する。	・動きを動画で伝える。
・分かりやすい情報を書く。	（音声）
・バランスのよい配置（わりつけ）にする。	・大きな声で言う。
・見出しに伝えたいことをまとめる。	・はきはき話す。
・事実を書く。	・適切な間を取る。
	・ざつ音が入らないようにする。

※　網掛けした14項目：プレゼンテーションに関わる項目

３　研究のまとめと今後の課題

遠隔合同授業における児童同士の伝え合う活動において、児童に身に付けさせたい力を相手校と共有した上で学習過程の工夫を講じることは、児童の伝える力を高めることに効果的であった。今後は、校種、地域及び学校規模を変えていくなどして、他校との遠隔合同授業においても、児童の伝える力を高めることができるかについて検証していきたい。

【引用文献】

＊１，＊２　文部科学省，『第３期教育振興基本計画』，2018，p.84

【参考文献】

・樋口耕一，『社会調査のための計量テキスト分析　第２版』，ナカニシヤ出版，2020